

「ゲストハウス・ダーラナ」の 大久保清一さん（その1） ～スウェーデンに惚れ込んだ青年期～



東京・西荻窪に北欧料理店「ダーラナ」を開店した当時の大久保清一さん（1979年）（写真提供：ゲストハウス・ダーラナ）

おいしいスウェーデン料理が食べられる南会津町南郷地区の「ゲストハウス・ダーラナ」。県外に暮らすオーナーの大久保清一さんにお会いできたので、東京生まれの大久保さんが、奥会津の古民家を改築してゲストハウスとして生まれ変わらせた経緯を伺った。大久保さんのお話を2回にわたってお伝えする。

東京で最初のオリンピックの開催（1964年）が近づく頃、17歳だった大久保青年は日本を飛び出したいくてたまらなかった。友人を訪ねた鹿児島で知り合った大学生の自転車を借りて東京まで走ったら、3週間もかからなかった。これなら一か月もかからずに日本を縦断できるんじゃないか。いや、それよりも、もっと大きな大陸を走ってみたい。

ヨーロッパから中近東を越えてアジアを自転車でひた走る、という大久保青年の壮大な計画は実行されることはなかったが、別な人生のシナリオが彼を待ち受けていた。

一般庶民にはパスポートを取るのも精一杯な時代。大久保青年は、1966年、19歳のときに、横浜港から船でソ連のナホトカに渡り、シベリア横断鉄道でモスクワへ向かった。そして、フィンランドのヘルシンキに着くと、すぐにスウェーデンに行った。スウェーデンに行けばアルバイトができると耳にしていたからだ。

ひと月ほど苦勞して最初に就いた仕事は皿洗いだ。だが、皿洗いでも結構賃金がよかった。一生懸命に仕事をして、それから南へ旅に出るつもりでいたが、スウェーデンがあまりにも居心地がよすぎた。当時のスウェーデン人は正直者ばかりな感じで、人を疑うような人がいなかった。パスポート1枚しか持たない自分を信用して、気軽に部屋を貸してくれたりする。「あの頃のスウェーデンって本当に素晴らしかったですよ！」。

大久保青年は、食べるのが大好きで、スウェーデン料理などは、日本の食事よりも気に入ってしまった。ヴェルムランドの田舎町にヒッチハイクで旅をしていて泊まったホテルの待遇が素晴らしく、食事もすごくおいしかった。

「こんな食事、最高だ！と思って、そこのオーナーに働かせてくれないかって聞いてみたんですよ。そしたらすぐに職をくれて。そこでスウェーデン料理の教育を受けて、経験書を書いてもらって、それからいろんな町のレストランで働けるようになった」。



スウェーデン時代の清一さん（左）（写真提供：ゲストハウス・ダーラナ）



スウェーデンのダーラナ地方（撮影：市東玲美奈）

ストックホルムやエレブロなどの都市にもいたが、一番気に入ったのがダーラナだった。ダーラナには、馬と生活をする人、電気や水道をひかずに生活をする人など、牧歌的な生活を好む人が多かった。

「スウェーデンは、貧乏旅行者を豊かに迎えてくれる国だったってことだよ。出会った人たちはみんな素晴らしい人ばかりだった」。

スウェーデンで10年働き、帰国後の1979年、大久保さんは東京の西荻窪で北欧料理店「ダーラナ」をオープンする。4、5年後には、東京・六本木に北欧料理店「リラ・ダーラナ」を開店した。

（六本木の「リラ・ダーラナ」は現在、別の方が受け継いでいる。）

「スウェーデンと似たような風景の中で、あるいは環境の中で生きたかった」という大久保さんは、店の休みのたびに奥会津を訪れるようになった。40年近く前のことだ。（つづく）

「ゲストハウス・ダーラナ」

<http://dalarna.jp/guesthouse/>